

(2019年3月15日ご講演)

## 朝日新聞編集委員が見て、感動してしまった中小企業たち

朝日新聞社 編集委員

中島 隆 委員

朝日新聞で編集委員というのは専門的にテーマを見つけてやっていいということで、私は勝手に中小企業の応援団長と名乗っている。私がなぜ中小企業に魅せられたかを話せば、「経済合理性など、くそくらえ」といったようなことを以前ここで言った記憶があるが、なぜそう考えているのかが分かるかと思う。皆さんのように研究をしているわけでもない、いろいろ考えて、今日まとめてきた。

朝日新聞ではまず新入社員になると、地方の支局で、私は鹿児島だったが、そこで事件や高校野球を担当する。その後、経済部へ上がる人は経済部へ上がるが、経済部は大企業中心に、自動車、流通、電機、日本銀行などと担当が分かれる。中小企業はほぼ一切視野に入っていないという状況がずっとあった。

例のリーマンショックのときに年越し派遣村がたくさんできた中で、彼らは派遣社員を人件費ではなく物品費という取り扱いをしていることが分かって、これは問題ではないかと思った。そこで中小企業に目を向けたら、雇用は死んでも守るとか、さらに自分の不動産を担保に入れて金を作るなどすごいなと思って、だんだん中小企業にのめり込んできたということである。

### ★大企業は絶対しないこと

#### ・名古屋の「フリースタイル」ーよし、ぼくはウルトラマンになる

(「愛、よろしく(上、中、下)」朝日新聞、2018年3月15日~17日、朝刊)

「愛、よろしく」というタイトルの記事を3日連続で書いた。これは名古屋の「フリースタイル」という会社であるが、なぜ「愛、よろしく」にしたか。

この社長は在日韓国人で、貧しい生活をして家族で2~3回夜逃げもした。高校を出て、肉屋、宝石屋、高級羽毛布団の営業など、いろいろなことをやってそれなりに儲けてはいたが、全部飲み食い、もっと上を目指そうと高額な自己啓発セミナーに金を使ってしまった。結局26歳で4,000万円ぐらいの借金を抱えてしまい、彼はどこに行ったかという、子供の頃に暮らした大阪の団地に夜バイクに乗って行く。14階まで上がって、塀を跳び越えて「死のう」とぶら下がった。そのとき彼は何を思ったか。「生まれ変わったらウルトラマンになろう。無償の愛で自分の危険など顧みず人のために尽くす、そういう人間になる

う」と手を離そうとしたそのときに、ちょっと待てよと。生まれ変わったとして、「よし、ウルトラマンになろう」とまた思い出すのはおそらく 20 歳ぐらいだろうと。じゃあ 20 年後かと考えたとき、人生 80 年だとしたら今 26 歳だからまだ 54 年ある。だったら今からウルトラマンになればいいんだと、そう思い直して扉をよじ登った。

そして、まず借金をしている先に頭を下げてまわって、まず待ってくれと。それから少しずつ借金を返した。彼は大阪の人だったので、違う場所で復活しようと名古屋に行った。名古屋では、元ヤンキー、引きこもり、昔の自分のような人たちを助けようと雇って、一からたたき直した。電機量販店の店頭に立たせて挨拶から始め、少しずつ更正させていく。そういうことをずっとやってきた。今社員が 150 人ぐらいだろうか、いろいろなゲームソフトなどを制作している会社である。ポリシーはとりあえず愛だと。こういう会社がある。これにまず私はすごく感動した。

#### ・北九州の「野口石油」ーきみが盗んだんか、少年院を出てきたら雇うけん

(「春風の中小企業をたどって 1」朝日新聞、2015 年 4 月 7 日、夕刊)

北九州市に野口石油というガソリンスタンドがある。野口義弘社長は法務省に表彰された、結構有名な人である。ガソリンスタンドはガラス張りなので、スタンド荒らしをされやすい。ある日スタンド荒らしに遭って金を盗まれた。そのとき女性従業員に「社長、人に会ってくれませんか」と言われて会ったのが、実は犯人だった。野口氏は何と言ったかという、「罪を償って出てきたら雇うからね」と。野口氏は、そのように少年院や刑務所に入った人を雇い、力を付けさせて運転免許も取らせ、次のステップへ送り出すということをや延べ 100 人以上もやってきている人で、法務省からも表彰を受けている。

大企業はそういう人たちを雇わない。お分かりのようにコンプライアンス違反、また何かがあるか分からないということで、ほぼ雇わない。協力雇用主制度などがあるが、結局こういった人たちを雇うのは皆中小企業である。大企業はいろいろ基金を作って金を出す、自分たちは雇わない。

元ヤンキーなどに聞くと、「金を出すなら仕事をくれ」と言っていたが、少年院を出て仕事があるかないかで再犯率が 3 倍から 5 倍くらい違うらしい。ということは、日本の社会は今もだいぶ物騒であるが、彼らのような会社がなければ、さらに物騒だったのではないかと思って、これもすごいなと感動した。

#### ・大阪の「千房」

同じような会社で知っている方もいるかもしれないが、銀座や大阪にある「千房」というお好み焼き屋も実は元受刑者などを雇っている。「千房」は大きいチェーン店であるが、資本金は 1,000 万円である。なぜかというところ中小企業であり過ぎるため。上場は一切せず

に、ここの社長（現会長）も、罪を償ったら雇ってあげないとやはり社会がおかしくなる、犯した罪は刑務所で償ったのだから第二の人生を応援してやろうということをやっている。

以上が「大企業は絶対しないこと」というくくりである。

## ★何でもあり

### ・群馬の「中里スプリング」ーすべての判断は、好きか嫌いか

（「真夏の町工場をたどって1」朝日新聞、2016年8月1日、夕刊）

ここで少し映像をご覧いただく。

（動画視聴）

この「中里スプリング」の中里良一社長は今64歳。すべてのことを好き嫌いで決めるという方針でやっている。例えば2人面接に来たとする。一人は即戦力があってバリバリにできそうで、もう一人はすごく弱いと。そのときに社長は考える。どちらを採用したら喜んでくれるかなど。中里氏は、即戦力ではなく、この人を雇ったら絶対この人は喜んでくれるだろうなど、そちらのほうが好きだなと、自分の行動としてはそちらがいいなということ、すべてを好き嫌いで選ぶ。

動画にもあったが、すごく頑張った人には嫌いな取引先を切る権利がある。要は偉そうな会社や、無理なコストダウンを要求する会社などはバツと切る。その権利を与える。しかし、切っていったら仕事なくなるのではと思うのだが、実は中里社長は「日本一楽しい町工場を目指す」と言っているので結構講演に呼ばれる。講演に呼ばれたらまず交通費はタダだし、そこで飛び込み営業をする。1件切ったら10件ぐらい増やしている。

会社は群馬県甘楽町という、高崎駅から上信電鉄で1時間ぐらいのところ、田んぼと畑の中にある。社員は今24～25人。彼はマックス28人にしかしないとっている。なぜかという、彼は清水の次郎長が好きで、次郎長の子分は28人だからと。群馬だったら本当は国定忠治ではないのかと私が言ったら、「いや、国定忠治は人を育てていない。次郎長は人を育てている」と言う。自分一人の力で28人までは幸せにできると考えている。実際、彼が営業を開拓した結果、取引先は47都道府県を制覇した。いま全国の市町村での取引を目指してやっていて、すごいなと思った。社長は下戸なのだが、私が酒を飲んでいるときにも力説してくれたすごい人である。

彼は金属の商社で飛び込み営業をしていたが、「おまえのところなんか知るか」と水を掛けられたりしたらしい。そこで、なぜ仕事は嫌なことをしなくてはいけないのかと。部活にしる恋愛にしる好きなことをやっているのに、なぜ仕事だけ嫌いなことをやらなければいけないのか。それなら、仕事も好きなことをしようと考えた人である。

### ・千葉の「京北スーパー」－売れる筋商品、置きません

（「へえな会社」、朝日新聞、2013年12月9日、夕刊）

柏駅にはイトーヨーカドーがあって、以前はそごうもあったが、この京北スーパーは商店街の真ん中にある本当に小さなスーパー。柏を中心に何店舗かある。ここがすごいと思ったのは、大手食品メーカーの売れる商品は置かないというところ。そういうものはほかのお店でどうぞと。その代わり、食べても絶対安心・安全なもの、おいしいをテーマに品ぞろえをしていて、かなりの人気を得ている。柏の流通戦争で結構勝っている勝ち組の会社である。

相当昔に、たばこをやめると宣言をした。「たばこの販売をやめるとはどういうことだ」といろいろなクレームが来たが、それでもやった。ずっと安全や健康にこだわってやってきている会社である。

### ・東京の「ジー・ブーン」－社内ではニックネームで呼び合います

（「へえな会社」朝日新聞、2016年4月18日、夕刊）

「ニックネームで夢かなえよう」。これもバカだと思ったが（笑）、秋葉原に「ジー・ブーン」という会社がある。行って驚いたが、ハリ・ポッターの一場面にあるような場所や、ディズニーのリトルプリンセスのような部屋などいろいろある。

後藤稔行社長は、社内では皆ニックネームで呼び合おうと。そのニックネームも、私なら中島隆なので「ナカちゃん」「タカちゃん」という安易なものではない。自分はどのような人間になりたいかが分かるようなニックネームを申告して、社長がうんと言わなければダメだと。

記事に書いた彼は、海賊船の船長のように頑張ろうと思って「船長」はどうかと言うと、ダメだと。次に、「ジャック・スワロー」。映画「パイレーツ・オブ・カリビアン」の船長ジャック・スパロウと、ヤクルト・スワローズとの合体で「ジャック・スワロー」。でも君はまだジャック・スパロウになっていないということで、「ささやかながら、ちょっとジャック」。「セバスチャンさくら」氏は、いろいろなディズニーアニメに出てくる執事のセバスチャンと、桜の季節の入社で、この名前にした。そのようにニックネームで呼び合って、今こういうことを目指しているといったようことを社内で共有する。そのうち、この人の本名は何だっけと忘れてしまうと言っていた。そういうことをやっていると、へえーと思った。

### ・佐賀の「ブレースホーム」－お客さま訪問、毎月、20年

（「へえな会社」朝日新聞、2014年9月8日、夕刊）

ここもよくやるなと思ったが、佐賀県の吉野ヶ里遺跡のすぐ近くにある「ブレースホー

ム」という会社。ここは何をやっているかという、家を建ててくれたお客様のところ  
何かご用命はありますかと、毎月行く。20年間必ず続ける。経費がかかっても徹底的にや  
っている。これもよくやるなど。恐らく上場会社だったら、そのようなことをやって何の  
得になるのかと株主から言われることを一生懸命やっている。これもへえーと思った。

## ★障がい者などの雇用

### ・神奈川の「日本理化学工業」－障がい者雇用率 70%超え

(「へえな会社」朝日新聞、2018年3月5日、夕刊)

ここは超有名なチョークの会社の「日本理化学工業」。川崎市にある会社である。社員の  
7割ぐらいが障がいがある方で、そういう方たちでもチョークが造れるように造り方をいろ  
いろ工夫して、日本国内シェアトップの会社になっている。

今、障がい者雇用率は2.2%である。45.5人に1人は雇わなければいけない。雇っていな  
いところにはペナルティーがあるが、雇っていないところも多いし、ご存じのように官公  
庁でも雇っていなかったと言っていたが、中小企業の中には障がい者をたくさん雇ってい  
るところがある。ここだけではない。

### ・埼玉の「東工業所」－雇用のラストホープ

(「魂の中小企業」障がい者、シングルマザー…。雇用のラストホープ 前編・後編  
朝日新聞デジタル、2016年12月6日、13日)

埼玉県「東(あずま)工業所」もその一つで、いろいろな人を雇っている。

要は、何でもありと。株主は会社の社長と多くは従業員なので、何でもやっているぞと。  
皆がOKだったら何でもありでやっている。

## ★発明

### ・東京の「日進産業」－下町ロケット、魔法の塗料

(「真夏の町工場をたどって5」朝日新聞、2016年8月5日、夕刊)

東京板橋にある「日進産業」に「魔法の塗料」というものがある。

(動画視聴)

石子達次郎社長がなぜこのような粉を造ったか。そもそも仕事がなく何でも屋として、  
ドブさらいや芝刈りなどいろいろやっていたのだが、あるとき工場の冷暖房の断熱の仕事  
が入ってきた。工場と工場の隙間に断熱材を入れようとしたが、その隙間に断熱材は厚過  
ぎるので何とかしようと。そこでセラミックで造った塗料を塗れば少し違うかなと試して

みた。最初は黒や赤などの色で試したが、なかなかできなかった。あるとき、新聞の折込み広告で黒いものと白いものがたまたまあったらしく、どこかに置いてあった虫眼鏡が太陽光線を集めて黒い広告が燃えた。白で試してみたら燃えなかった。これがヒントではないかと、そこからスタートして、この白い塗料を造った。

この塗料は今タンカーの上の部分に結構使われている。タンカーが航行する中東のスエズ運河のあたりは非常に暑い、その塗料を塗っておくと暑くない。韓国の船にも使われている。岩谷直治記念賞、省エネ大賞などの賞も取っている。

そして、この塗料を使ってあることをやっている人がいる。

## ★世の中に訴えたい

### ・全国 150 をこえるペンキ屋たちーひたすらボランティア

(「春風の中小企業をたどって7」朝日新聞、2015年4月15日、夕刊)

これは「塗魂ペインターズ」というペンキ屋の方たちの集まりである。

(動画視聴)

彼らが使っているのが、先ほどの「魔法の塗料」である。北海道の夕張市はご存じのように財政破綻をしたところで、非常に寒くて暑いときは暑く、ボランティアで市役所などの塗装をしていくと、エアコン代が節約できると感謝されている。

はっきり言って彼らは元ワルである。元スペクターの総長、元暴力団の何とかなど、殺人はしていないが元強盗犯であったりと、すごいので驚く。私どもの新聞などでもあると思うが、ペンキ屋の方が何か事件を起こすと「塗装工」と書く。「塗装工〇〇が逮捕された」と、なぜペンキ屋だけ「塗装工」と出るのか。普通は「会社員」と書くことが多いし、ペンキ屋も会社組織が多いので会社員と同じではないかと言うのだが、ペンキ屋だけ「塗装工」と出る。そうなると、塗装工のイメージが悪くなる。そもそも自分たちが悪いことをしてきたのだが、塗装工はワルの集まりだというイメージをどうにかしたいと思い、そういう人たちでもボランティアはできるということでやり始めた。そうして、だんだんやっているうちに、それはもうどうでもいいやと。皆が喜んでくれることだったらそれでいいと。実はボランティアの活動地域は世界に広がっている。2年前はハワイに行った。ハワイも非常に暑い。州政府はお金が足りない、高校のエアコン代を節約するために昼間は家に帰らせようとしたそう。それを聞いて、「じゃあ塗りに行きます」と彼らが行って無償で塗った。すると教室の温度が下がって昼間も勉強できるようになった。

それに味を占めて次どこへ行ったかという、リトアニア。リトアニアは旧バルト三国で、そこには杉原千畝ハウスがある。戦争中、ユダヤ人にどんどん出国ビザを出した元外交官の杉原千畝氏がはんこを押していた領事館が「杉原千畝ハウス」という名前で残っている。私も行って来たが、壁などは皆ボロボロである。老朽化が進んでいて、それこそ戦争が終わって74年で、もう90年ぐらいたっているからボロボロで修復できない。リトア

ニア政府にお金はないし、杉原千畝ハウスの保存をしている人たちにもお金がない。そこで彼らが行って壁を塗ってきた。これも全部自腹で行っている。非常に時間がかかる。ヘルシンキまで飛んで、さらにリトニアの隣のエストニアかどこかの空港に飛んで、そこからバスで3時間ぐらいかかる。ほぼ1日かかりだが、彼らはそこまで行った。

次にどこへ行ったかという、去年はタイへ行った。タイの貧民街にある小学校を塗りに行った。バカではないかと思うが、行った。日本だけではなく世界に愛を届けるのだと。すごくいいなと思って、今紹介した。

## ・東京の「リベルタ」－足の裏つるつる、アメリカでも大人気

(「地域発企業発－足裏パック 世界でヒット」朝日新聞、2013年5月21日、朝刊)

またガラッと変わる。

(動画視聴)

靴下の形をしたビニール袋の中に特殊な溶液が入っている。遊びながらテレビを見ながらでもいいので、これを1時間ぐらい履いて足を漬けておく。そのあと足を洗って普通に生活していれば、ボロボロ剥けて、きれいになる。実際私もやってみたが、3日目ぐらから変化があって、確かにきれいになった。角質が全部取れる。これは今アメリカで大ヒットしていて、Amazon のコスメ部門のようなところでナンバーワンを取ったり、いろいろなタイトルがあるらしいが、アメリカで今10冠目と言っていた。世界50カ国ぐらいに出ている。

これをつくっているのが、渋谷にある「リベルタ」という社員70人ぐらいの会社で、もともとは水虫の薬をつくっていた。ところが、薬事法の改正で水虫が治ると謳えなくなってしまって、さて、どうしようと。これは困ったぞということで少し転換して、足裏パックをやり始めたら大ヒットした。1,000万個以上売れている。

お金がなくて宣伝できないので何をやったかという、YouTube や SNS 戦略。まず商品を無料でバーッと配って、その代わりに SNS で写真をアップしてもらったり、YouTube など動画でアップしてもらおう。それを見て私も私もということで世界に広がった。お金がないので SNS や YouTube を使った。

## ・東京の「佐田」

さて、またバカなことをやっている人がいるので、少しお見せする。本当に信じられないバカである。

(動画視聴)

自社のビジネススーツを着てスキージャンプをしていたのが社長の佐田展隆氏だが、彼はもともと一橋大のスキー部でノルディックの複合をやっていた。スキージャンプのほか

にも、スーツを着て富士山の頂上から山スキーで下りてきたりと、いろいろやっている。

この「佐田」（2019年8月に「オーダースーツSADA」へ社名変更）という会社は一度コケて民事再生になり、彼のお父さんは自己破産して、彼は自己破産するだけの金もなく離れていた。あるファン্ডがその会社に入って再建しようとしたが、ファン্ডがやる気がなくなってしまった。そこで社員たちが佐田氏に戻ってきてほしいということで戻って、今全国に50店舗ぐらいある。

中国に工場があり、全部オーダースーツだが、きれいにオーダーしたものをネットで中国に飛ばして安くつくり、初回1着1万9,800円で売っている。彼のすごいところは、お金がなかったので何をしようかと考えて、動画でバカなことをやろうと。今もピンピンして元気で、この前一緒に釣りに行ったときもスーツを着てやっていた（笑）。もう本当にバカだと思う。

#### ・沖縄の「塩屋（まーすやー）」（パラダイスプラン）

こういう会社があるのだということを伝えたいと昨日急に思った。この30日にジェットスターという航空会社が成田から宮古島までのダイレクト便を片道約7,000円で就航するが、その宮古島にある会社である。

（動画視聴）

塩の店「塩屋（まーすやー）」は、麻布十番、スカイツリーのソラマチなど東京にもあって、全国にある。実は西里長治社長は、言い方は悪いが、もともとは汲み取り屋である。島の浄化槽の仕事をしていて、やはり島は基本サトウキビの産業しかないので何とかしたいと考えていたときに塩を思い付いた。雪が降らない宮古島で塩の雪が降るといって売り出して成功している。

世界中から塩を集めて売っているが、塩のソムリエという制度を設けて、社員が頑張ると塩のいろいろな技術を身に付けたらソムリエと認定して給料を上げる。沖縄のさらに離島の宮古島から世界へ発信ということで「目指せニューヨーク」と言っていた。

#### ★そして、中小企業の心意気

##### ・名古屋、いまはなき「ホテルアソシア名古屋ターミナル」一何はともあれ、従業員の幸せ。それが稼働率ナンバー1に

（「春風の中小企業をたどって11」、朝日新聞、2015年4月21日、夕刊）

最後に、これは2010年まで名古屋駅の隣にあったJR東海系列の「ホテルアソシア名古屋ターミナル」の話である。

（動画視聴）

黒字になるのにあと少し足りないというときに何をしたか。労働組合がベースダウンを

申し入れて黒字にした。かつて食中毒事件があったとき、それでも予約が殺到した。大好きなホテルでいつもお世話になっているからと、お客さんが彼らを助けてあげようとしたのだと思う。

もともと大赤字の会社だったが、そこに元 JR の労働組合の柴田秋雄氏が来た。彼は何をやったかという、労働組合の使命は社員の幸せであるからと、社員の幸せをまず最優先にした。そうすると何が起こるか。社員たちは幸せになってくると、お客さんを大切にしようと考え始める。だが、お金もない、どうしようと。そこで、こういうことをやった。お客さんが名古屋駅からホテルに来る途中ピアスを落としてしまったと聞き、従業員皆で探して見つけた。スーツケースの暗証番号を忘れたのでカギを壊して開けてほしいと言われたが、1時間ほど待ってもらい、0 から試し続けてカギを開けたという、すごいことをやった。宴会場ではギターを弾いたり歌を歌ったり、歌舞伎役者姿で口上を披露したりした。従業員に聴覚障がいの方もいたが、一生懸命サービスする。するとファンができて、このホテルはウォッシュレットもなければエスカレーターもなかったが、稼働率が名古屋でナンバーワンになった。

残念なことに再開発されて今はないのだが、高学歴な人がいるわけではなく、周りの外資系ホテルのようなどころではないが、中小企業でもナンバーワンになれる。そういうことも起こる。柴田氏に取材で話を聞いて、すごいなと思った。

中小企業はこういうこともできるのだということで、今日の私のつたない話を終わりにしようと思う。